

# 惟喬親王「白雲の絶えずたなびく峰にだに」歌の解釈

—— 隠逸世界への視点と雲林院文化圏との交流を背景に ——

赤木裕子

はじめに

- 一、従来の解釈について
- 二、「白雲」という景物について
- 三、惟喬親王の出家後の生活
- 四、雲林院文化圏との交流
- 五、「白雲の」歌の再解釈について

おわりに

『古今和歌集』には、惟喬親王の「白雲の絶えずたなびく峰にだにに住めば住みぬる世にこそありけれ」という和歌がとられている。この和歌について従来の解釈では、惟喬親王の出家後の悲痛な心情や孤独さを読み取るものが多かった。そうした解釈に対し、本稿では隠逸世界への視点と雲林院文化圏との交流を視座に考察していく。惟喬親王歌における「白雲」は、隠逸世界を象徴する景物としての側面を持っており、また彼の出家後の生活環境は、『菅家文草』におさめられている清和天皇への上表文によると「水石幽閑地」「煙霞晩暮家」というように、まさしく隠者が暮らすような場所であった。さらに彼が親しく交流していた雲林院文化圏は、常康親王の遁世の地であり、そこで編まれた漢詩集では「山人道士」「隠逸梵門」といった部類の作品が重視されたという。このように、惟喬親王は出家前後を通じて隠逸世界との関わりが深く、そのため彼の「白雲の」という和歌についても、そうした隠逸思想が強く反映されているのではないかと考えるのである。

## はじめに

惟喬親王は、承和十一（八四四）年寛平九（八九七）年の人物で、文徳天皇の第一皇子である。母は紀名虎女の静子。弟に、藤原良房女の明子を母に持つ、惟仁親王（清和天皇）がいる。『日本三代実録』によると、貞観十四（八七二）年七月、病のため出家したとされている。<sup>①</sup>『伊勢物語』には彼と在原業平を中心とした文学による君臣の交わりの様子が描かれており、また中世には『平家物語』『曾我物語』などの軍記物語において清和天皇との位争いの様子が説話的に語られるなど、長らく物語世界の中で享受されてきた人物である。

惟喬親王の文学活動については、『古今和歌集』に「桜花散らば散らなむ散らずとてふるさと人の来ても見なくに（春歌下・七四）」、「白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住みぬる世にこそありけれ（雑歌下・九四五）」という二首の和歌がおさめられているほかに、『和漢朗詠集』に漢詩文の一部がとられている。<sup>②</sup>さらに、鎌倉時代に成立した百科事典『二中歴』の「詩人歴」という項に名を残しており、和漢に秀でた文人であったことがうかがえる。

本稿では、先にあげた『古今和歌集』雑歌下の部におさめられている「白雲の絶えずたなびく峰にだに」という和

歌を対象に考察していきたいと思う。この和歌については古今を通じて多くの研究者によって解釈されてきたのであるが、未だに解釈の余地は残されているようである。その中でも、従来は指摘されてこなかった、隠逸世界への視線と、雲林院文化圏との交流といった二つの事柄を背景に見据えて新たな解釈を試みたいと考える。

### 一、従来の解釈について

さて、本稿で取り上げるのは『古今和歌集』におさめられている次の和歌である。

白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住みぬる世にこそありけれ  
（雑歌下・九四五・惟喬親王）

詞書は無く、この和歌の成立事情について詳しく知るところとは出来ないが、鎌倉末期の作とされる『古今集注』に「此歌ハ惟喬ノ親王遁世シ給テ小野里ニ住給フトキヨミ給ヘリ」<sup>③</sup>とあるのははじめ、松田武夫氏も「奇説の多い毘沙門堂注を始め、慎重な余材抄に至るまで、この惟喬親王の、比叡山麓、小野への遁世閑居を背景において解するむきがあるが、肯定すべきであろう」<sup>④</sup>と述べており、出家後に詠まれたものとする解釈が主流である。和歌における「白

雲」「峰」「住めば住みぬる」といった表現をみても、出家後に山中にて遁世生活を送る中で詠まれたものと見てよいであろう。

この和歌がこれまでにどのような解釈をされてきたか、その一端をみていくと次のようになる。

『両度聞書』・東常縁（講釈）、宗祇（著書）

惟喬の御子は、十善の位にもつき給べき御身の其本意も叶はせ給はで、しかも世をのがれ、かすかなる山里などにおはします此、世の中を思取りてよみ給ける心まことにあはれあさからずこそ。

『古今和歌余材抄』・契沖<sup>⑥</sup>

六帖に題峯作者をしるさず護身の上にもかくは思べきをことに文徳天皇第一の皇子にましく御うつくしみも他にことにおはせし御身をやつして世をのがれてかすかにおはしましけるほどの事思ひやりて見るべし。

『古今和歌集評釈』・金子元臣<sup>⑦</sup>

金殿玉棲にのみ起臥された御心地に、はじめは住み遂げ難く思し召された山住であったが、自然の成行に抗しかねて、そこにあきらめが湧いたやうなお歌で、御

心の中を察すると、実に畏くも悲しい。

東常縁の講釈を宗祇が書き記した『両度聞書』では「十善の位にもつき給べき御身」であった惟喬親王が「かすかなる山里」に住むことになり「世の中を思取りて」和歌を詠んだ、その悲哀の情深さを推察している。全体的に位争い譚の影響がうかがわれる解釈である。契沖の『古今和歌余材抄』では位争い譚への言及は無いが、宗祇と同様にかつては「御うつくしみも他にことにおはせし御身」であった親王が「御身をやつして世をのがれてかすかにおはしましたける」ことになったその心情を思い遣って解釈するよりに提言している。宮中では父である文徳天皇の寵愛も受けながら慈しみ大切に育てられていた過去の惟喬親王の姿と、山中でひっそりと生活する現在の惟喬親王の姿とを比較し、その落差に同情しているのである。こうした解釈に連なるのが金子元臣氏であり、宮中での生活においては「金殿玉棲にのみ起臥された」であろう惟喬親王が、山中での生活を受け入れるようになるまでの心境を推しはかり、諦念や悲痛の情を読み取っている。

これらの注釈は、「白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住みぬる世にこそありけれ」という和歌表現の背景に、かつての宮中での不自由な暮らしを想定して、現在と過

去との落差から、詠者である惟喬親王の悲痛を読み取るものである。ここでの「だに」という副助詞は「最低の意を表わす<sup>(8)</sup>」とされるが、宮中での生活と比べて、最低限度の場所が「白雲の絶えずたなびく峰」であるとする。

一方で「白雲の絶えずたなびく峰」という表現については、物理的な距離の遠さを表すものだとする解釈がある。新日本古典文学大系では「白雲の…峰にだに」に対して「人里から隔絶した山上をいう表現」という注釈をつけているのであるが、他にも、片桐洋一氏はこの和歌の要旨を、

人里離れた所での隠遁生活も、しようと思えば、なんとかできることであるよとみずからに言い聞かせているのである。<sup>(10)</sup>

と解説しており、「白雲の絶えずたなびく峰」に該当する箇所を「人里離れた所」と言い換えている。

以上、惟喬親王歌が従来どのように解釈されてきたのか、その一端をみてきたのであるが、その中で「白雲の絶えずたなびく峰」という表現については、「宮中での生活から掛け離れた最低限の場所」として理解するものがある一方で、「人里から遠く離れた峰」というように物理的な距離

の遠さを表現していると解釈するものがあることが分かった。

では、果たして惟喬親王にとって自身が現在暮らす「白雲の絶えずたなびく峰」は、かつての宮中での生活との落差を自覚させ、悲痛や諦念を生む場所であったのであろうか。あるいは、人里との隔絶を意味する場所であったのであろうか。

## 二、「白雲」という景物について

へ和歌における白雲

まず、「白雲の絶えずたなびく峰」を人里から隔絶した場所とする解釈についてであるが、こうした解釈が生まれるのは『万葉集』をはじめとする和歌の世界における「白雲」という景物への、あるイメージが定着しているためだと考えられる。『万葉集』には、

ここに<sup>(11)</sup>して家やもいづち白雲のたなびく山を越えて来  
にけり  
(巻第三・二八七)

後れ居て我が恋ひ居れば白雲のたなびく山を今日か越  
ゆらむ  
(巻第九・一六八一)

白雲の五百重に隠り遠くとも夕去らず見む妹があたり  
は  
(巻第一〇・二〇二六)

といった和歌がある。一首目は、白雲のたなびく山を越えてはるばるやって来たので家がどの方向にあったのか分からなくなった、というものである。二首目は、家に残って私が恋しく思っているところあなたは白雲のたなびく山を今日にも越えているのであろうか、というものである。これらの和歌は惟喬親王歌と同じように白雲のたなびく山が詠みこまれている。ここからは、山の高さが白雲のたなびく程に高いものであること、そこから、自分と家、自分と相手との距離が非常に遠いものであることが分かる。白雲が、両者の間にある距離の遠さを自覚させるものとして機能しているといえる。三首目の「白雲の五百重に隠り遠くとも」という和歌においてはその機能がより顕著にみられ、私とあなたとの距離は、白雲が幾重にも重なり覆い隠す程に離れているが、夜ごとにあなたの居る辺りを見ましよう、という意味となっている。また、ここでの白雲は自分と相手との距離の遠さを自覚させるだけでなく、相手のいる辺りを眺める詠者の視界を遮る障害物としての機能も有している。

このように、『万葉集』における白雲の表現の一例として、山の高さを強調し自分と対象との距離を自覚させるもの、視界を遮るものとして用いられていることが分かる。こうした『万葉集』における「白雲」の用例について、大

谷雅夫氏は漢詩文の影響を指摘し「南北朝から隋唐にかけての、望郷詩の詩、あるいは遠い夫や友人を思う詩にみられる類型」の存在を述べ、「遙かな人や土地を遠望しようとする時、「白雲」がその視界をさえぎり隔てる。地平線、水平線の上に置なわる「白雲」が、遠い距離の隔絶を象徴する。それが詩の「白雲」の表現の一類型であった」としている<sup>①</sup>。そうした詩語の「白雲」が和歌に取り入れられたのである。漢詩文の世界では地平線や水平線に横たわる白雲が、和歌の世界では山や峰とともに詠まれるようになるなど、日本の風土や思想に近いものへと表現は変化していくが、隔ての雲としてのイメージは依然として受け継がれ、平安時代にいたっても次のような和歌が詠まれている。

白雲の八重にかさなるをちにても思はむ人に心へだつ  
な  
(古今・離別歌・三八〇・紀貫之)

思やる心許はさはらじを何隔つらん峰の白雲  
(後撰・離別羈旅・一三〇六・橘直幹)

前者は、白雲が八重に重なる程に遠くに行っても心は隔てないで欲しい、というものである。また、後者のように、あなたを心で思いやるだけならさしつかえないだろうに峰の白雲はどうして二人の間を隔てているのであろうか、と

いう和歌もある。

これらの用例をみると、確かに和歌の世界における「白雲」は、人と人との距離を強調し、両者の間を隔てる障害物として詠まれることが多いことが分かる。

〈漢詩文における「白雲」〉

大谷氏は、こうした和歌における「白雲」という景物の持つイメージは、漢詩文にみられる隔ての雲のイメージを享受したものであるとしているが、漢詩文において「白雲」はまた別のイメージも持っているのである。『漢詩の事典』【雲（白雲・青雲・浮雲・朝雲）】の項には、次のように書かれている。

雲は、その中に様々なイメージを蓄えている。その一つに、「白雲」がある。それは、社会的な束縛から解放されたこと、つまり自由の、象徴である。またその意味を限定すれば、隠遁の譬喩でもあった。<sup>13)</sup>

ここでは「白雲」は「隠逸の譬喩」であると説明されている。漢詩文の世界におけるこうした「白雲」のイメージの歴史は長く、中野将氏は「白雲」の語は六朝期晋代の頃から神仙、あるいは隱者をいう作品に多くみられるよう

になってゆく」と指摘し、さらに「白雲」に超俗的・神秘的なイメージをもつようになったきっかけについて、「六朝期は隠逸・神仙・仏教などに対して興味・関心が高まった時期だが、その思想的基盤となった道家思想の書、『莊子』天地第十二に次のような寓話が見える」として『莊子』の影響を指摘している。<sup>14)</sup> 中野氏が引用しているのは『莊子』外篇・天地篇・第十二の、

千歳厭世 千歳世を厭えば

去而上僊 去りて上僊し

乗彼白雲 彼の白雲に乗じて

至于帝郷 帝郷に至る

という箇所である。中野氏はさらに「次の唐代、「白雲」が俗世を離れた場所や人物の象徴であったり、自由のイメージと結びついている例がみられるのは、六朝時代のこの傾向が姿を変えながら依然として継続してゆくことを示すものであろう」と述べている。例えば、唐代の詩人である李白には、「白雲」の登場する次のような詩がある。

「白雲歌 送劉十六帰山」<sup>15)</sup>

楚山秦山皆白雲

白雲処処長随君

白雲処処 長に君に随ふ

長随君

長に君に随ひ

君入楚山裏

君は楚山の裏に入る

雲亦随君渡湘水

雲も亦た君に随ひて湘水を渡る

湘水上

湘水のう

女羅衣

女羅の衣

白雲堪臥君早帰

白雲臥するに堪ふ 君早く帰れ

これは、帰山する友人を送るための詩である。山は隱者の住まいであり、その山へ帰隱する友人に白雲が付き従う。そしてその山で、君は隱者の衣裳である女羅衣をまとい、白雲のしとねに寝ころぶがよい、と賦すのである。隱逸世界と「白雲」という景物との結びつきの強さがうかがわれる詩である。

こうした隱逸世界・脱俗世界の象徴としての「白雲」は、日本漢詩文においても、神仙詩や隱逸詩などにおいて広く享受された。その中で、僧侶が暮らす清閑な空間を描写する際にも多く用いられているので、いくつかみていきたい。

『経国集』卷第十・「見老僧帰山。一首」 嵯峨上皇

道性本来塵事遐

道性本来塵事遐かなり

独将衣鉢向煙霞

独り衣鉢を将ちて煙霞に向ふ

定知行尽秋山路

定めて知りぬ行きて秋山の路を尽

白雲深处是僧家

白雲深き処是れ僧家なることを

『菅家文章』卷第二・「山寺」 菅原道真

古寺人踪絶

古寺人踪絶ゆ

僧房挿白雲

僧房白雲を挿む

門当秋水見

門は秋水に当りて見る

鐘逐曉風聞

鐘は曉風に逐ひて聞ゆ

老臈高僧積

老臈高僧積みたまへり

深苔小道分

深苔小道分れたり

文珠何処在

文珠何れの処にか在せる

帰路趁香薰

帰路香の薰を趁ぐ

『性霊集』卷第三・「勅賜屏風書了即献表。并詩」 空海

蒼嶺白雲觀念人

蒼嶺白雲觀念の人

等閑絶却草行真

等閑がてらに絶ち却く草行真

心遊仏会不遊筆

心仏会に遊ぶで筆に遊ばず

不顧揚波爾許春

揚波を顧みずして爾許の春ぞ

『経国集』の「見老僧帰山。一首」は、秋山の路を行く

と白雲が深く立ち込める場所があり、その場所こそが独り

修行する老僧の家であることを知ったというもの。『菅家文章』の「山寺」は、人の訪れの絶えた山にある僧の住まいには白雲が漂っているというもので、高僧の暮らす山中の幽玄さ・静寂さを賦したものである。『性霊集』の引用部分は、空海が嵯峨天皇への上表文中で記した詩の一部である。「蒼嶺白雲觀念の人」とは、青々とした山で白雲がたなびいているという環境の中で、觀念修行をしている空海自身のことを指している。

これらの表現をみて分かるように、平安時代初期の日本漢詩文において「白雲」とは、隱者や僧の暮らす閑静な場所に似つかわしい景物として用いられてきたのである。そうした場所は世間の喧騒とは隔絶された場所であるが、そこに孤独や悲哀は感じられず、静けさや幽玄さを感じさせるものとなっている。

以上のように、「白雲」という景物は、同じく漢詩文から享受され和歌の世界でも用いられてきた人と人とを隔てる障害物としての側面を持つ一方で、隱逸・脱俗世界の象徴としての側面も持っているのである。隱逸世界が俗世と遠く隔たっているという意味では通じるところもあるが、両者の持つイメージは大きく異なるであろう。隔ての象徴である「白雲」は離別の悲痛さや孤独さを滲ませる表現であるが、隱逸・脱俗世界の象徴としての「白雲」はその場

所の幽寂さや清浄さを感じさせる表現である。

惟喬親王歌の「白雲のたえずたなびく雲」についても、私は、隱逸・脱俗世界の象徴として解釈することも可能なのではないか、むしろそちらの方が適しているのではないかと考えるのである。彼は漢詩文にも通じていた人物であったのでそうした漢詩的イメージも持ち合わせていたであろうし、出家後に幽閑な山中で仏道修行に励んでいた彼にとっては、隱逸世界を象徴する景物としての「白雲」の方が身近であったのではないだろうかと思われるのである。

### 三、惟喬親王の出家後の生活

彼の出家後の生活を伝える上表文があるので、そちらをみていきたい。尚、上表文を引用した際の括弧内の書き下しは、私に行ったものである。

『菅家文章』卷第十・「為小野親王（惟喬親王）謝別給封戸第一表」

臣某言。去九月二十一日勅旨、賜臣百戸之封、以助齋食之費。仰承温煦、未悟比量。中謝臣往年病発、沈困不帰。謝簪纓於帝城、約香火於积衆。菩提一念、身雖在草庵之中、空觀六時、心未離魏闕之下。

大<sub>レ</sub>到<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>門、万<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>省<sub>レ</sub>折。灰<sub>レ</sub>冷<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>服<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>避<sub>レ</sub>風、菜<sub>レ</sub>茹<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>澹<sub>レ</sub>資<sub>レ</sub>送<sub>レ</sub>日。若<sub>レ</sub>更<sub>レ</sub>蒙<sub>レ</sub>新<sub>レ</sub>賞、猶<sub>レ</sub>滿<sub>レ</sub>、旧<sub>レ</sub>封<sub>レ</sub>、水<sub>レ</sub>石<sub>レ</sub>幽

閑<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>地、有<sub>レ</sub>嫌<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>貯<sub>レ</sub>藏。煙<sub>レ</sub>霞<sub>レ</sub>晚<sub>レ</sub>暮<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>家、無<sub>レ</sub>節<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>遊

用。陛<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>寵<sub>レ</sub>光<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>翅、恩<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>恩<sub>レ</sub>甚<sub>レ</sub>深。臣<sub>レ</sub>虛<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>功、過

而<sub>レ</sub>再<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>推<sub>レ</sub>重。伏<sub>レ</sub>願、臣<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>察<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>丹<sub>レ</sub>疑、照<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>素<sub>レ</sub>情。卷

中<sub>レ</sub>緯<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>九<sub>レ</sub>重、留<sub>レ</sub>、上<sub>レ</sub>腴<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>戸、臣<sub>レ</sub>願<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>矣、臣<sub>レ</sub>望<sub>レ</sub>稱<sub>レ</sub>焉。

臣<sub>レ</sub>某<sub>レ</sub>誠<sub>レ</sub>惶<sub>レ</sub>誠<sub>レ</sub>恐、頓<sub>レ</sub>首<sub>レ</sub>、死<sub>レ</sub>罪<sub>レ</sub>、謹<sub>レ</sub>言。

貞<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>六（六<sub>レ</sub>字<sub>レ</sub>底<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>脱、抛<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>実<sub>レ</sub>録<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>補）年<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>九<sub>レ</sub>日

これは、惟喬親王の出家から二年が経過した、貞觀十六（八七四）年に書かれたものである。出家後の惟喬親王の生活を案じた清和天皇が「賜<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>百<sub>レ</sub>戸<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>封、以<sub>レ</sub>助<sub>レ</sub>齋<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>費」（百戸の封を賜い、以つて齋食の費を助く）という勅旨を出したのであるが、それを辞退するという内容になっている。その中で、惟喬親王は「身<sub>レ</sub>雖<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>草<sub>レ</sub>庵<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>中」（身は草庵の中に在りと雖も）、「心<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>魏<sub>レ</sub>闕<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>下」（心は未だ魏闕の下を離れず）」とあるように、出家した現在では身体は草庵の中に在つて簡素な生活を送つてはいるが、心は未だに朝廷を離れていない、とする。そうした状況で、更に新たな封戸をこうむれば、「水<sub>レ</sub>石<sub>レ</sub>幽<sub>レ</sub>閑<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>地、有<sub>レ</sub>嫌<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>貯<sub>レ</sub>藏」（水石幽閑の地、貯藏に嫌ひ有り）、「煙<sub>レ</sub>霞<sub>レ</sub>晚<sub>レ</sub>暮<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>家、

無<sub>レ</sub>節<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>遊<sub>レ</sub>用」（煙霞晚暮の家、遊用に節無し）」であるという。

「水石幽閑地」とは、水と石のある幽閑な土地という意味

味であると思われるが、『菅家文章』巻第五・「廬山異花

詩」に「水石相逢此地神（水石は相逢ひて此の地ぞ神し

き）」という用例があるように、その土地の神秘的雰囲気

を伝えるものとして登場する場合もある。そうした神聖な

場所で、不要な貯藏を行うことは憚られるとする。

また「煙霞晚暮家」とある。波戸岡旭氏は、『楚辞』な

どの用例をもとに「煙霞」の語は、古く神仙思想と結び

つき、神仙界を暗示したり、俗塵を去つて清澄な境地を意

味するものとして用いられた<sup>①</sup>とする。その後「煙霞」は、

それ自身が美的対象として賦されるようになるなど多彩な

広がりをもせるのであるが、そうした中でもやはり神仙世

界との結びつきは強いようである。論中で波戸岡氏は『論

衡』・道虚に「口飢欲食、仙人輒飲我以流霞一杯。每飲一

杯、数月不飢（口飢多食を欲すれば、仙人輒ち我に飲まし

むるに流霞一杯を以てす。一杯を飲む毎に、数月飢えず）」

というように仙人の飲みものとして「流霞」というものが

あることを述べ、『懷風藻』に至つては犬上王の「遊覽山

水」という詩の中に「雲疊酌煙霞 花藻誦英俊（雲疊煙霞

見立てた用例がみられることを指摘する。<sup>(18)</sup> 惟喬親王と同時代の用例をみても、『菅家文章』巻第二・「賦<sub>二</sub>得春深道士家<sub>一</sub>」に「喰清晩暮霞（喰は清らなり晩暮の霞）」とあつたり、『日本三代実録』の貞観十六（八七四）年十月十八日の項に「煙霞を喰飯に当て」という表現があるように、<sup>(19)</sup> 道士や隠者の食べるものとして用いられていることがわかる。上表文中にある「煙霞晩暮家」という表現は、隠者の食事である煙霞が漂う清澄な夕暮れの家で、遊び用いることに節度が無くなつてしまうことを危惧する表現なのである。

このように、未だに心からの遁世生活には入れていないが、そうした中で「菩提一念」「空観六時」というように仏道修行を行っている現在の様子や、まるで隠逸世界のよ<sub>うな</sub>幽閑で神聖な山中で、隠者のように脱俗的な生活を志す惟喬親王の心情をうかがうことができるのである。

惟喬親王は封戸を辞退したが、清和天皇は使者を送り再度勅旨を伝える。次の文章は、それに対する惟喬親王の上表文である。

『菅家文章』巻第十・「為<sub>二</sub>小野親王<sub>一</sub>重謝<sub>二</sub>別給封戸<sub>一</sub>第二表」

臣某言。中使右近衛少将平朝臣正範至<sub>二</sub>臣草庵<sub>一</sub>、宣伝口勅。推（推字、本朝文集作<sub>レ</sub>推）心出<sub>レ</sub>言、中情自見。量<sub>レ</sub>分辞<sub>レ</sub>賞、上表無<sub>レ</sub>聴。臣葭<sub>レ</sub>孳<sub>レ</sub>屬<sub>レ</sub>貴、磐石对<sub>レ</sub>高。将<sub>下</sub>繫<sub>二</sub>歛<sub>レ</sub>電<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>残魂<sub>一</sub>、庵趨<sub>中</sub>玄流<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>遺教<sub>上</sub>。王臣匪躬之義、念<sub>レ</sub>逾貞。仏子行道之勤、生<sub>レ</sub>何慢。至<sub>二</sub>彼曉嵐蕭颯<sub>一</sub>、誦<sub>レ</sub>経行、澗水潺湲、優遊自得、斯則所以陛下不<sub>レ</sub>咎<sub>二</sub>臣入道<sub>一</sub>、俾<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>臣本願<sub>一</sub>之故也。何更家蓄<sub>二</sub>万鍾<sub>一</sub>、空待<sub>二</sub>山鬼之瞰<sub>一</sub>。室無<sub>二</sub>懸磬<sub>一</sub>、長失<sub>二</sub>野夫之間<sub>一</sub>。陛下鴻慈、願賜<sub>二</sub>、照察<sub>一</sub>。臣之幸矣、不<sub>二</sub>亦悦<sub>レ</sub>乎。無勝<sub>二</sub>□<sub>一</sub>（恐脱一字、疑是懇字）疑、重累以聞。臣某謹言。

貞観十六（六字底本・坂本作<sub>レ</sub>三。拠<sub>二</sub>三代実録<sub>一</sub>訂）  
年十月二十五日

先にも述べたように、出家後の惟喬親王の生活の様子は簡素な草庵を居住地とし、周辺には清らかな水石や煙霞が点在する、まさに隠逸世界を体現したような場所であつた。こちらの上表文には、「澗水潺湲」という表現がある。『大漢和辞典』<sup>(20)</sup>によると、「澗水」とは「たにみづ。谷川の水」のことである。杜甫の「憶幼子」に「澗水空山道（澗水空山の道）」とあり、谷川の流れる空山の道を表現した例がみられる。

また「潺湲」について、同じく『大漢和辞典』には「水

の流れるさま。又、其の声」とある。『楚辞』・九歌・「湘夫人」では「荒忽兮遠望 觀流水兮潺湲（荒忽として遠く望めば 流水の潺湲たるを觀る）」とあり「心もうつろに遠く望めば、さらさらと水が流れるのをみるだけである」と訳される。

これらの言葉の日本における用例をみると、次のようなものがある。

『性靈集』卷第一・「山中有何樂」 空海

澗水一杯朝支命 澗水一杯朝に命を支え

山霞一咽夕谷神 山霞一咽夕に神を谷ふ

『本朝文粹』卷第一・「山家秋歌。越調」 紀長谷雄

空山幽静水潺湲 空山幽静にして水潺湲たり

独臥雲中不限年 独り雲中に臥して年を限らず

休世夢断塵縁 世夢を休め塵縁を断つ

苒苒唯展坐禅筵 苒苒唯展ぶるのみ坐禅の筵

前者は、先にも挙げた空海の『性靈集』にみられる詩の一部である。谷川の水を飲み水として命を支える、という意味となっている。後者は『本朝文粹』におさめられている「山家秋歌。越調」の一部であるが、この詩における

「潺湲」という言葉は、幽静な山中で川の水がさらさらと流れる様を表現している。いずれも漢籍の場合と同じ意味で用いられているが、ここで注目されるのは、詩題にあるように山について詠まれた詩であるということ、そして両者に共通してその山が、前者では「神を谷ふ」、後者では「独り雲中に臥して年を限らず」「世夢を休め塵縁を断つ」と表現されるような世俗から離れた仙人や隠者が暮らす場所として詠まれているということである。「澗水」「潺湲」という言葉で表現される、さらさらと流れる清らかな川の水も、「水石」や「煙霞」と同様に、隠逸世界と関わり深い景物として享受されてきたのである。

『菅家文章』卷第十・「為二小野親王一重謝二別給封戸一第三表」

臣某言。去月二十六日、中使左近衛少将藤原朝臣有実至、謹奉勅答。宣諭殷勤、淚汗俱下。中謝臣昔帶職從事之日、冠蓋無非聖恩。臣今移病出家之時、衣鉢皆是官施。一死一生、或出或処。若負恩德、明神極之。臣伏案、去十月二十三日施行詔書、勸督州吏、掩水傷之尸骸、収拾郡民、復風害之僮。自古聖帝明王、未聞無災。唯在克己復礼（礼字之

下、底本有「謂礼二字、恐衍」。謂之有道而已。方今如「綸命之旨、養臣以孔懷之親」。陛下既憂國家、小臣豈安、寢夢。嗟乎、臣鄉、栽松竹、寒而不可裁衣。産業香華、飢而不可充食。然猶庶幾、手掬山椀、以備租稅之逋懸、肩昇野蔬、以助黎民之炊爨。曷為當此有損之年、空受無功之賞。使陛下取名於私親、小臣、忘義於知止。縱天下譏不載于口、而臣独自不懼于心乎。伏望、特賜優恕、察臣愚歎。臣寄生者陛下、將終始於一心。臣師事者世尊、何屈申於両舌。不敢飾謙、恐処違勅。慈悲哀愍、必垂聽許。不堪悃誠之至、重以上表拜聞。臣某誠惶誠恐、頓首、死罪、謹言。

貞觀十六年十一月

そして、清和天皇からの再三の勅旨に対し惟喬親王は、自分のための封戸を先日の災害で苦しむ民を救うために使つように返答して固辞するのである。

これらの文章は清和天皇への上表文であり、ある程度形式に沿ったものではあるが、惟喬親王は隠逸世界のような清閑な山中で、自分の意思で必要最低限のものだけを持ち、「仏子行道勤」「誦誦経行」に励み「世尊」を師とする出家生活を送っていたのである。

前項の「白雲」の解釈に話を戻すが、このような生活空間の中で見る「白雲」という景物は、他の景物と同様に、隠逸世界を象徴するものとして彼の目に映つたのではないだろうか。日本漢詩文の世界において「白雲」が長らく隠者や僧の暮らす場所に漂うものとして用いられてきたことや、出家後の惟喬親王の生活空間がまさしく漢詩文で詠われる隠逸世界のような場所であったことを考えると、惟喬親王の和歌における「白雲の絶えずたなびく峰」というのも、「まさに隠者が暮らすような、白雲の絶えずたなびく峰」というように解釈するのが適当ではないかと考えるのである。

#### 四、雲林院文化圏との交流

また、惟喬親王と隠逸世界との関わりを考える中で、雲林院文化圏の存在は見逃せないであろう。雲林院というのは、京都市北区紫野にある寺院である。もともとは淳和天皇の離宮であり紫野院と号したが、天長九（八三二）年に雲林亭と改称され、後に雲林院となった。惟喬親王の時代、雲林院は常康親王の居住地となっており、そこへは遍照や幽仙法師などの僧や文人たちが集まり詩歌が詠まれた。雲林院にて誕生したこうした文化圏は、その性格から「隠者の文化圏」ともみなされる<sup>23</sup>。

常康親王とは、仁明天皇を父とし、紀名虎の娘である紀種子を母とする人物であり、同じく紀名虎の娘である紀静子を母にもつ惟喬親王にとっては、従兄弟同士の関係であった。『日本文徳天皇実録』仁寿元（八五一）年二月二十三日の項には、

無品常康親王落髮為僧。親王者。先皇第七子也。母紀氏。少而沈敏。風情可察。先皇諸子之中。特所鐘愛。親王追慕先皇。悲哽無已。遂歸仏理。求冥救也。

とあり、父である仁明天皇崩御の後、追慕と悲嘆の念は止むことなく、遂に仏門に帰依したことが記されている。また、『菅家文草』巻第十一・「為大蔵大丞藤原清瀬、家地施入雲林院願文」に、

貞観十五年五月十八日。

弟子 正六位上大蔵大丞藤原朝臣清瀬敬白。深草聖帝第七皇子「常康親王」、避躁之地、名雲林院。始皇子入道、安禅此院、便命弟子、勾当家事。皇子賜弟子、以随近之地、令備其侍宿之居。手書加恩、遺跡可驗。嗟呼閻浮泡幻之國、娑婆露電之卿、生滅

不期、心事相失。皇子仙化之夕、即是今朝也。

とあるように、その常康親王が、出家後に俗世間の喧騒を逃れて仏道修行の場として居住したのが雲林院である。

「雲林」という言葉は『大漢和辞典』によると、「雲のかかつてゐる林」とある。王維の「桃源行」には、

当時只記入山深 当時只だ記す山に入ること深く  
青溪幾度到雲林 青溪幾度か雲林に到りしを  
春来遍是桃花水 春来れば遍く是れ桃花の水  
不弁仙源何処尋 仙源を弁ぜず何れの処にか尋ねん

といった箇所があり、田部井文雄氏は「当時のことは、ただ、山の奥に深く入り、深みどりの清い谷川を何回も渡つて、雲のかかった奥深い林にたどりついたことを記憶しているだけ。春が来るとすべて、どこにも桃の花びらを浮かべて流れる水はみなざりあふれ、桃源の仙境を見定め得ず、もはやどこにたずねあてることができるであろうか」と訳している。他に白居易の「香山下卜居」にも、

老須為老計 老いては須らく老計を為すべし

老計在抽簪 老計は抽簪に在り

山下初投足 山下に初めて投足するや

人間久息心 人間は久しく息心す

乱藤遮石壁 乱藤は石壁を遮り

絶澗護雲林 絶澗は雲林を護る

若要深蔵処 若し深蔵の処を要すれば

無如此処深 此の処の深きに如くは無し

という用例がみられる。この詩は、年を取れば最後の計画を立てなければならぬとして、官職を引退し山下に隠居することを説くのであるが、その隠居場所として「生い茂る藤は岸壁を覆い、深い谷を流れる川が雲湧く森を護っている」というこの場所ほど深いところはない、とする<sup>26</sup>。これらの例をみて分かるように「雲林」とは、世間から遠ざかり山の奥深く分け入ってはじめて辿り着く、雲のかかった林のことである。そのため、神仙世界、隠逸世界と強く結びつく言葉でもある<sup>27</sup>。

『古今和歌集』志香須賀本には「雲林院にてよめる」という詞書を持つ、次のような和歌がある。

さわぎなき雲の林に入りぬればいとど憂き世の厭はる  
るかな  
惟喬親王<sup>28</sup>

和歌の詠者は惟喬親王となっているが、その真偽については定かではない。しかしこの和歌からは、「雲の林」と称される雲林院が、その名前の由来の通りに、俗世間と断絶した静寂で清らかな雰囲気をもった場所であったことをうかがうことが出来るのである。

〈雲林院における隠逸思想〉

常康親王には『洞中小集』という私選の漢詩文集があった。集自体は現存していないとされており、そこにどのような作品が採られていたかは不明であるが、『菅家文章』には常康親王の依頼に依りて、道真によつて書かれた『洞中小集』の序文が残っている。尚、括弧内の書き下し文及び解説、訳は『菅家文章注釈文章篇 第一冊（巻七上）』より滝川幸司氏のものに従った<sup>29</sup>。

『菅家文章』巻第七・「洞中小集序」

貞観九年依二雲林院親王命一所レ製。

貧道投<sub>レ</sub>分香火、ト宅雲林。盃酒非<sub>レ</sub>吾道之資、笙歌非<sub>レ</sub>吾家之備。毎<sub>レ</sub>逢佳時令節、空然擲度而已。送<sub>レ</sub>日送<sub>レ</sub>老、都無<sub>レ</sub>一二二字、本朝文集作<sub>レ</sub>一物。今選斯一集、聊宛<sub>レ</sub>用心。流別非常、体例自<sub>レ</sub>我。寒食者悼<sub>レ</sub>亡之祭、重陽者避<sub>レ</sub>惡之術。故本<sub>レ</sub>義幽閑、寄<sub>レ</sub>言節候。

又詠竹樹、賦魚鳥。楽山水、重離別之類、与世人異情、与閑放同趣者、選以載之。況乎山人道士、隱逸梵門、近取諸身。多可景式。故雖座上口号、行中立成。或就四時、或專一軸。兼載不尠、繁多何嫌。凡今之所選、每各免俗。故名曰洞中小集、約為五卷。自非草庵之裏、松澗之中、不欲吟詠一句、伝写一篇。若有至親故友、縱今与吾異道、何為秘藏。 丁亥歲（貞觀九年）九月十日解。

ここには、集の編纂の意図等が語られているのであるが、その中に「況乎山人道士、隱逸梵門、近取諸身（況むや、山人道士、隱逸梵門は、近く諸を身に取り、多く景式とすべきをや）」とある。この部分について滝川氏は「自らがあこがれる「山人道士、隱逸梵門」の類の作品は、載せるのが当然だという」と解説している。また、「自非草庵之裏、松澗之中、不欲吟詠一句、伝写一篇（草庵の裏、松澗の中に非ざるよりは、一句を吟詠し、一篇を伝写するを欲せず）」という一文もある。この一文は同じく滝川氏によつて「草の庵の中、松のある谷の中にいるような俗世を離れた人にこそ、一句でも吟詠して欲しいし、一篇でも書写して欲しい」と訳されている。道真が書いた文章ではあるが、こうした表現には常康親王の意向も強く反映され

ているものと思われる。『洞中小集』がいかに隱逸思想に基づいた集であったかが分かるのである。

〈惟喬親王との交流〉

『洞中小集』の序文が完成したのは貞觀九（八六七）年であるが、その翌年には、雲林院にて惟喬親王の母である静子の二周忌にあたる法要が行われており、惟喬親王と常康親王との交流のあったことが記されている。

『菅家文章』卷十一・「為彈正尹親王先妣紀氏修功德願文」

貞觀十年八月二十七日。

弟子某「惟喬親王」、歸命稽首。弟子先妣紀氏「静子」、初筭之後、入侍先宮。約意薦蘿、承恩床第。綺羅脂粉之勞、豈止一朝一夕而已。（中略）。又雲林院者、深草天皇「仁明天皇」第七皇子「常康親王」之幽莊也。禪枝定水、謂之為三聚之林泉。石磬霜鐘、謂之為六時之漏刻。皇子之於弟子也、緇白雖異、親懿捨諸。今之此会、必至此院者、仰亦就先妣之所由也。況乎法界道場、何処非鹿苑。如來不住、誰家非鷲峰。香之百和、華之四種、或生合掌、或起善心者也。（以下略）。

この願文は、惟喬親王からの依頼に応じて道真が書いたものであるが、ここには常康親王に関する記述もある。特に傍線部については、山口博氏が「緇」は雲林院親王、「白」は惟喬親王で、両人は僧俗を異にするいえども親懿を捨てずという<sup>30)</sup>と解しているように、二人の親密さを窺わせるものである。そしてその親密さは血縁の關係によるものだけでなく、蔵中氏に「彼（※惟喬親王を指す）は雲林院文学にかかわる初期の文人であり歌人であった」という指摘もあるように、文学的活動という側面においても深く関わっていたと推測されている。

こうした記述をみると、少なくとも惟喬親王の出家の四年前には雲林院との交流があったことが知られるのであり、雲林院にて脱俗的な生活を志し、自身が理想とする隱逸詩や梵門詩を集めた『洞中小集』を完成させた常康親王の生き方や思想等が、出家後の惟喬親王の生き方に影響を与えた可能性は十分に考えられるのである。

隱逸思想というのは平安時代の知識人たちに広く享受された思想ではあるが、その大半の知識人たちが実際は官僚世界に身を置きながら虚構の隱逸世界を夢想したのに対して、常康・惟喬の両親王は実際に隱逸世界のような場所に暮らしていたという点で、非常に特異な存在だったので

ないかと思われる。当時の知識人たちは、心は隱逸世界に憧れながらも、実際には貴族社会から抜け出すことの出来ないジレンマを抱えていた。『昔家文章』巻第六・「閑適」は、道真が障子絵を題材にして賦した「近院山水障子詩」の中の一部であるが、そこには次のように賦されている。

曾向簪纓行路難 曾向簪纓のひと行路難

如今杖策処身安 如今し策を杖きて身を処くこと安

なり

風松颯々閑無事 風松颯颯たり閑にして事なし

請見虚舟浪不干 請ふ見よ虚しき舟は浪も干さざる

ことを

こうした「近院山水障子詩」の表現について後藤昭雄氏は「ここに詠出されているのは、現実には全く反対の立場に置かれている、簪纓を身に帯び、機累に煩わされ、世路の險難に苦しめられてはかならない<sup>31)</sup>」としている。「近院山水障子詩」が賦されたのは昌泰二（八九九）年頃とされ、政治的にも文人の立場的にも惟喬親王らの時代とは事情が異なるであろう。しかし、官人として宮中で生きる道真が理想とした、「曾向簪纓」であり「如今杖策処身安」という

隠者の姿は、一昔前にまさしくそうした隠者としての生活を送った常康親王や惟喬親王の姿と通じるものがあるのではないだろうか。『菅家文章』には常康・惟喬の両親王に関わる文章が多く残されているが、彼らとの交流の中で道真は、その生き方や思想に対して共感や思慕の念を抱いたのではないかと思われるのである。

〈出家後の惟喬親王と雲林院文化圏〉

雲林院にて紀静子の法会が行われた翌年の貞観十一年（八六九）五月に常康親王は没し、その後、貞観十四（八七二）年に惟喬親王は病のため出家する。常康親王の存命中に、

雲林院の親王の舍利会に山のぼりて帰りけるに、  
桜の花のもとにてよめる

山風に桜吹きまき乱れなむ花のまぎれにたちとまるべ  
く  
（離別歌・三九四・僧正遍照）

というように親しく交流し、後に親王から雲林院を託された遍照は、

雲林院の木のかげにたたずみてよめる

わび人のわきて立ち寄る木のもとに頼む蔭なく紅葉散りけり  
（秋歌下・二九二・僧正遍照）

と、親王亡き後に彼を偲ぶ和歌を雲林院にて詠んでいる。それほどに、遍照は雲林院文化圏にとって重要な人物であったのであるが、そうした遍照に対して惟喬親王は、

僧正遍照によみておくりける

桜花散らば散らなむ散らずとてふるさと人の来ても見なく  
（春歌下・七四・惟喬親王）

という和歌を贈っている。詞書に「僧正遍照」とあることから、遍照が僧正となった仁和元（八八五）年から、遍照が没する寛平二（八九〇）年までの間に詠まれたものと推測される。表面上は桜に対して、どうせ昔からの友人は来てくれないのだから散るならば散っておくれと呼びかけるものであるが、独詠ではなく遍照への贈答歌として詠んでいるところからみても、遠まわしに花見に誘う意図があるものと思われる。惟喬親王の出家後も、雲林院文化圏に関わった人物との交友関係は続いていたのである。

惟喬親王の交友関係といえは業平との交流が有名であるが、惟喬親王の出家後については、

惟喬親王のもとにまかり通ひけるを、頭おろして小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶらはむとてまかりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪いと深かりけり。しひてかの室にまかりいたりて拝みけるに、つれづれとして、いとものがなくして、帰りまうできて、よみておくりける

忘れては夢かと思ふおもひきや雪踏みわけて君を見むとは  
(雑歌下・九七〇・在原業平)

という、出家から半年後の一月に庵を訪れたことが知られるのみである。業平は陽成天皇のもとで順調に昇進し宮中で両者の交流がどの程度続いていたかは不明である。業平が没したのは元慶四(八八〇)年であり、先の「桜花散らば散らなむ散らずとて」歌が遍照に贈られた頃には既にこの世を去っていた。遍照が没したのは寛平二(八九〇)年であり、惟喬親王が没したのは寛平九(八九七)年であった。晩年の惟喬親王にとって遍照は、昔語りのできる大切な旧友であったのであろう。

## 五、「白雲」の歌の再解釈について

ここまでみてきた内容を踏まえながら、惟喬親王歌につ

いて改めて解釈していきたい。

まず、上の句の「白雲の絶えずたなびく峰」であるが、この表現は、惟喬親王が実際に暮らす山の様子を詩文で表現されるような隠逸世界のような場所に見立てて為されたものではないかと考える。「まさに隠者の暮らすような、白雲の絶えずたなびく峰」となる。

そして、「だに」という副助詞は最低限のものを表すとされ、『日本国語大辞典』においても「期待される最小限のものごと・状態を指示する」と説明されているが、実際に和歌においてどのように用いられているのかをみると次のようなものがある。

山城の淀の若菰かりにだに來ぬ人頼む我ぞはかなき

(恋歌五・七五九・読人知らず)

夢にだに逢ふことかたくなりゆくは我や寝を寝ぬ人や忘るる

(恋歌五・七六七・読人知らず)

声をだに聞かて別るる魂よりもなき床に寝む君ぞかなしき

(哀傷歌・八五八・読人知らず)

一首目の和歌は、(真心からはもちろん来ないが)仮初にできえない人を頼む私にはかないものだ、というもの。二首目も同様に(現実ではもちろん逢うことが難しいが)

夢にでさえ逢い難くなるのは私が眠らないからか、それともあなたが私を忘れていたのであろうか、というものである。三首目は、病のために死の際にある女が、他国に赴いている男を思つて詠んだ歌であり、(姿を見ることはもちろんのこと)声さえも聞かずに別れることになる私の魂よりも、私の死後に独り寝ることになるあなたのことが不敏でならない、というものである。このように、「だに」は最低限・最小限の事柄を言うときに用いられるのであり、言外に対比されるものを補うことができる。そのために先行研究では「白雲の絶えずたなびく峰」での生活と、宮中での生活とが比較されてきたのであるが、私はここに、もう一つ別の可能性を考えたい。

それが、先にみてきた雲林院の存在である。雲林院文化圏は、常康親王の遁世の地であり、そこには僧などの隠者が集まっていた。「雲の林」の名前を持つ、隠逸世界を体現したかのようなこの空間は惟喬親王も親しんだ場所であり、その空間の主人であった常康親王とは血縁的にも思想的にも近い人物であった。

こうした背景を踏まえて考えると、かつて隠者たちが集まっていた「雲」のかかった「林」はもちろんのこと、「白雲」の絶えずたなびく「峰」にでさえも、住んでみれば住むことの出来る世の中なのであるなあ、という解釈が

出来るのである。

さらに「住めば住みぬる」という部分には、「住めば澄みぬる」、つまり住んでみれば心も澄んでしまう、という二重の意味が込められているとも考えることが出来る。それならばいつそうこの和歌が、一首全体を通じて隠逸世界と関わりの深いものであることが分かるのである。

### おわりに

以上みてきたように、「白雲」という景物は隠逸世界と結びつきの強いものであったこと、惟喬親王の出家後の生活空間がまさしく隠者の暮らすような場所であったこと、常康親王を中心とする隠者たちが集う雲林院文化圏との交流があったこと、「雲林」という言葉が、山を深く分け入った先にある「雲のかかった林」を意味するものであったことなどを総合して考えると、彼が出家後に山中で詠んだ「白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住みぬる世にこそありけれ」という和歌は、「かつて常康親王の遁世の地であった雲のかかった林にはもちろん住むことが出来るが」、まるで隠逸世界のような白雲の絶えずたなびく峰にでさえも、住んでみれば住むことのできる、そのような世の中であるなあ」といった解釈となるのである。一首全体を通して、隠者と関わりの深い表現や思考によって構成された和

歌だといえる。そしてそのように考えると、この和歌からは山中での暮らしに対する諦念や悲痛といった感情よりも、詩文に詠われる隠者の暮らすような幽玄で清閑な峰にできえも、自分はどうにか暮らして行くことが出来たという、惟喬親王の感慨や達成感のようなものさえ感じられるのである。

#### 注

- (1) 『日本三代実録』（『読み下し日本三代実録 上巻』、戎光出版、二〇〇九年）  
貞観十四（八七二）年七月十一日の項に「四品守弾正尹惟喬親王疾に寝ぬ。頓に出家して沙門と為り給ひき」とある。
- (2) 『和漢朗詠集』（新編日本古典文学全集十九、小学館、一九九九年）には、次のような詩の一節がとられている。  
相如昔挑文君得相如は昔文君を挑んで得たり  
莫使簾中子細聽簾中をして子細に聴かしむること莫かれ  
琴（管弦・四六八・惟喬親王）
- (3) 古今和歌集古注釈大成『古今和歌余材抄 古今集注 古今秘注抄』（日本図書センター、一九七八年）
- (4) 松田武夫『新釈古今和歌集 下巻』（風間書房、一九七五年）
- (5) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題（三）』（赤尾照文堂、一九八一年）
- (6) (3)に同じ。
- (7) 金子元臣『古今和歌集評釈』（明治書院、一九九五年）
- (8) 竹岡正夫『古今和歌集全評釈 下巻』（右文書院、一九七

六年）

- (9) 新日本古典文学大系五『古今和歌集』（岩波書店、一九八九年）
- (10) 片桐洋一『古今和歌集全評釈 下巻』（講談社、一九八九年）。尚、片桐氏は同著において、惟喬親王の出家の理由を位争いに求める説については、『伊勢物語』の読解から生まれた後代の説話である」として否定している。
- (11) 大谷雅夫「白雲―歌語と詩語」（『国語国文』六十三（五）、一九九四年五月）
- (12) (11)に同じ。大谷氏は論中で、「白雲」は詩人常用の詩語であった。山の石に触れて生じ、岫（山のほらあな）に出入し、仙界に立ちこめ、あるいは大空を孤飛しては旅人の離愁をそえる」として、神仙世界と白雲との関わりに触れてはいらぬものの、論の中心は隔ての雲についてのものとなっている。
- (13) 松浦友久編著『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）
- (14) 中野将「浮雲・白雲」（『詩語のイメージ―唐詩を読むために』（東方書店、二〇〇〇年）収録。尚、中野氏によると、漢武帝の「秋風辞」という詩に賦される「白雲」には「無常なるもの・はかなく寄る辺ないもの・孤独のイメージが感ぜられる」としながらも、「こうしたイメージは『浮雲』に託されていったので、『白雲』のイメージの主流となることはなかった」という。
- (15) (14)に同じ。
- (16) 新釈漢文大系詩人編四『李白 上』（明治書院、二〇一九年）。尚、引用する上で句読点を省略したり表記を改めた箇所がある。
- (17) 波戸岡旭『上代漢詩文と中国文学』収録「第一編『懐風

藻」第五章 詩語「煙霞」考―六朝・初唐詩との関連―

(笠間書院、一九八九年)

- (18) (17)に同じ。尚、波戸岡氏は『懐風藻』から四例を挙げているが、いずれも「もやのかかる光景を描くものであるが、同時に濁酒の乳白色に「煙霞」の色合いをイメージさせて、宴の體を詠んでいる。それは殊更に仙人の酒である「流霞」を想つてのものではなく、自然と融合する中での酒宴を美しく描き留めようとする意図によるものであろう」と述べている。

- (19) 『日本三代実録』（「読み下し日本三代実録 上巻」、戎光祥出版、二〇〇九年）、貞観十六（八七四）年十月十八日、惟喬親王の上表文に対する清和天皇からの勅答の中で、「而るに王、慮を澗水に滌ぎ、欲を巖庵に窒ぎ、衣服に代ふるに薛蘿を以てし、煙霞を飡飯に当て、頬に野牘の詞彩を枉げ」とある。

惟喬親王の山中での生活を隠者の生活に見立てての表現であると考えられる。

- (20) 『大漢和辞典（修訂版） 第七』（大修館書店、一九八五年）

- (21) 石川忠久『漢詩をよむ 杜甫一〇〇選』（日本放送出版協会、一九九八年）より引用。

- (22) 漢詩大系三『楚辭』（集英社、一九六七年）より引用。

- (23) 藏中スミ氏は『歌人素性の研究』（桜楓社、一九八〇年）の中で、「仁明天皇出家の直接的な動機になっていると考えられる常康親王や遍昭が、その当時置かれていた状況からすれば、雲林院は世を厭う人の集まる場所としてあつたであろうと考えられるし、そこで文学が生み出されたとすれば、作品

の傾向もおのずから定まっていっただものと思われる。雲林院文化圏を隠者の文学圏とみなす理由である」と述べている。

また、谷口孝介氏は『菅原道真の詩と学問』の「第二章第三節 宇多天皇の風雅―雲林院子日行幸をめぐる―」（塙書房、二〇〇六年）中で、「平安京北郊にあつた雲林院は元来は天皇家の後院的性格を持つ離宮であつたが、仁明天皇第七皇子常康親王が賜りここで出家してより、隠逸の地としての性格が定着し」たとしている。

- (24) 『大漢和辞典（修訂版） 卷十二』（大修館書店、一九八六年）

- (25) 本文・訓説文・訳のいずれも、田部井文雄『唐詩三百首詳解 上巻』（大修館書店、一九八八年）による。

- (26) 本文・訓説文・訳のいずれも、新釈漢文大系一〇七『白氏文集 十一』（明治書院、二〇一五年）による。

- (27) 『菅家文章注釈文章篇 第一冊（巻七上）』収録「洞中小集序」、谷口孝介『菅原道真の詩と学問』収録「第二章 第三節 宇多天皇の風雅―雲林院子日行幸をめぐる―」（塙書房、二〇〇六年）などを参照されたい。

- (28) 『古今和歌集』（角川学芸出版、二〇〇九年）

- (29) 文章の会『菅家文章注釈文章篇 第一冊（巻七上）』（勉誠出版、二〇一四年）

- (30) 山口博『王朝歌壇の研究 桓武仁明光孝朝篇』第二章 第二節 雲林院の歌壇（桜楓社、一九八二年）

- (31) 藏中スミ『歌人素性の研究』（桜楓社、一九八〇年）

- (32) 後藤昭雄『菅原道真の「近院山水障子詩」をめぐる―』（『平安朝漢文学論考 補訂版』（勉誠出版、二〇〇五年）収録）

- (33) 『古今和歌集』の詞書においては、「仁和の御時、僧正遍

照に（賀歌・三四七）、「遍照が母の家に（秋歌上・二四八）」とあるように、和歌の詠まれた年代によって「僧正遍照」「遍照」との使い分けがなされていたことがうかがえる。

(34) 片桐洋一氏は『天才作家の虚像と実像 在原業平・小野小町』（新典社、一九九一年）「元慶元年十一月、陽成天皇の即位にあたって、従四位上・近衛権中将となったこと、そして『職事補任』によれば、元慶三年には藏人頭に至って頭中将として華々しく活躍したらしい」とする。

(35) 『日本国語大辞典 第二版 第八卷』（小学館、二〇〇一年）

**付記** 本論文中の引用は以下の通り。尚、適宜、字体・表記・句読点等を私に改めた箇所、傍線を引いた箇所がある。歌番号も以下のものに従った。

『懐風藻』：日本古典文学大系（岩波書店）、『菅家文草』：日本古典文学大系（岩波書店）、『経国集』：小島憲之『国風暗黒時代の文学 中（下）II—弘仁・天長期の文学を中心として—』（塙書房、一九八六年）、『古今和歌集』：新編日本古典文学全集（小学館）、『後撰和歌集』：新日本古典文学大系（岩波書店）、『性霊集』：日本古典文学大系（岩波書店）、『莊子』：新訂中国古典選（朝日新聞社）、『日本文徳天皇実録』：新訂増補国史大系普及版、『本朝文粹』：日本古典文学大系（岩波書店）、『万葉集』：新編日本古典文学全集（小学館）、『論衡』：新釈漢文大系（明治書院）（五十音順）。